

# 東京オリンピックと日本人のアイデンティティー

— 1964 年東京大会と首都美化運動、マナーキャンペーン —

斗 鬼 正 一\*

## はじめに

前回東京オリンピック開催の 1964 年当時の日本は、敗戦から戦後復興を遂げ、トランジスタラジオ、カメラなどが世界市場で評価されて、日本経済は大きく成長し、物質的に豊かで便利な社会が実現しつつある時期だった。そんな中開催されたオリンピックは、経済高度成長を加速し、日本を経済大国、先進国に押し上げる上で極めて重要な役割を果たした。

そして 2020 年東京オリンピックの開催が迫る現在も、大会そのものの以外での人々の関心は、施設、都市整備、そして経済効果などに向けられがちである。

しかしながら、1964 年オリンピック開催に際しては、スポーツイベントであるオリンピックと直接関係があるとは思えない、衛生、すなわちごみ、汚水、下水、し尿などの処理問題、チラシ、ビラ、看板、景観といった都市美化問題、ごみ、喫煙、整列乗車、運転、商道德といった人々のマナーの問題がとりわけ強調されたことにも注目しなければならない。

さらに、オリンピックはスポーツイベントではあるものの、異民族、異文化との出会いの場でもあり、民族のアイデンティティーという面でも、大きな影響を与える。1964 年の場合も、一大世界的イベントを成功裏に成し遂げた後には、敗戦の焼け跡から立ち上がり、復興を遂げた日本人

が、戦前戦中の大日本帝国臣民というアイデンティティーとは異なった、民主的で豊かな生活を享受する経済大国民、先進国民という新たなアイデンティティーを強固なものとして作り上げている。

そこで本稿では、まず 1964 年の東京オリンピックに際して行われた「首都美化運動」、マナーキャンペーンなどの実態を、当時の新聞記事を主材料に、筆者自身の知見を加えて明らかにすることとする。

そしてそうした衛生、清潔、美化、秩序、マナー、すなわち食、排泄、廃棄、行列といった人々の行動を統制する行動規範であるマナーの統制が、日本人のアイデンティティーの変動とどのようにかわってきたのかを考察していくこととする。

## 第 1 章 1964 年東京オリンピックと東京改造

### I. 開催決定

初の東京オリンピックは 1940 年に第 12 回大会として開催の予定だった。軍事大国化し帝国主義的進出を進めていた時代に紀元 2600 年記念と国威発揚をめざして万国博覧会とともに誘致し、1936 年に開催が決定、準備が進められていたが、日中戦争の泥沼化でどちらも返上という結果に終わったのである。

その後敗戦を経て、戦後復興がひと段落した時期に再びオリンピックの開催をめざし、まずは夏季大会誘致に挑戦したものの、1955 年の IOC 総会でローマに敗れて落選した。次をめざした 1959 年 5 月 26 日の IOC 総会では、デトロイト、

2017 年 11 月 30 日受付

\* 江戸川大学 現代社会学科教授 文化人類学

ウィーン、ブリュッセルの欧米3都市を破り、1964年10月10～24日の第18回オリンピック東京大会開催が決定した。

## II. 競技施設

当時の東京には、オリンピックを開催するのに十分な施設はなく、多くの施設がオリンピックのために新設された。国立代々木競技場第一体育館（競泳）、第二体育館（バスケットボール）は丹下健三設計の斬新なデザインで、1963年2月着工、1964年9月5日完成した。すぐ近くの重量挙げ会場の渋谷公会堂も渋谷区庁舎とともに1964年完成である。柔道の日本武道館は工事が遅れ、完成が9月15日、開場は開会式7日前の10月3日である。

既存の施設に手を入れて使ったものもあり、開閉会式、陸上競技が行われたメイン会場の国立霞ヶ丘陸上競技場は、アジア大会を控えた1958年完成で、オリンピック前にはスタンド増築、聖火台設置などの改修工事が行われた。ボクシングの後楽園アイスパレスは1951年、水球、体操の東京体育館は1954年、フェンシングの早稲田大学記念会堂は1957年に作られたもので、サッカーの秩父宮ラグビー場、体操、水球会場の東京都体育館も、既存施設に手加えられて使用された。

また馬事公苑と戸田漕艇場の場合は1940年オリンピックの会場として建設されたもので、同じく改修の上で使用された。レスリング、パレーボール、ホッケー、サッカーの会場の駒沢も、1940年大会のメイン会場、選手村の建設予定地とされながら未着工のままだったものを、改めて画期的な立体交差状の街路を配置するという全体計画のもと、1962年に着工、1964年に完成している。

## III. 宿泊施設

宿泊施設、とりわけ外国人が宿泊するようなホテルは数少なかったため、建設がすすめられ、1964年9月1日にホテルニューオータニ、東京プリンスホテルが開業するなど整備が進んだ。

## IV. 交通

### 航空

1964年2月には来日客の増加を見込んで進められていた羽田空港新滑走路が完成し、8月から始まった聖火リレーでは、那覇から鹿児島、宮崎、千歳への輸送に、戦後初の国産旅客機として開発されたYS-11が使用されている。

### 鉄道

鉄道でも、オリンピックをめざして多くの路線の建設、改良が進められた。

新宿では、1963年4月新宿駅付近の京王線が地下化されて新宿駅も地下駅となり、1964年2月には小田急新宿駅改良工事も完成している。国鉄では、5月に東口駅舎が完成し、9月20日には中央線中野、荻窪間の高架化工事も完成している。

地下鉄では、営団日比谷線は1964年8月29日に全線開業、30日には都営地下鉄1号線（現浅草線）新橋、大門間が開業したが、これも9月17日に開業した羽田空港からのアクセス路線である東京モノレールに接続する路線である。

そして斜陽と思われていた鉄道を革新する世界初、世界最速の高速鉄道で「夢の超特急」と呼ばれた東海道新幹線は開会式直前の10月1日に東京、新大阪間で開業したが、当初は速度が出せず、東京、新大阪間が4時間というダイヤだったことから分かるように、まさにオリンピックに間に合わせる突貫工事の末の開業だったのである。この疾走する新幹線こそがオリンピックめざした最大の大事業だったのだが、その後の経済高度成長の象徴的存在でもあり、かつ最大のけん引役となっていたのである。

### 首都高速道路

首都高速道路公団は1959年6月17日に発足し、オリンピックをめざして1962年12月20日に京橋―芝浦間4.5kmが初の首都高として開通した。

1963年12月には本町―京橋間1.9km、1号羽田線芝浦―鈴ヶ森間6.4km、都心環状線呉服橋―江戸橋JCT間0.6kmが開通、1964年8月2日

には1号羽田線鈴ヶ森―空港西4.6 km、八重洲線汐留JCT―新橋0.3 km、神田橋―4号新宿線初台9.8 km、都心環状線呉服橋―神田橋0.4 kmが開通した。さらに開催直前の9月21日に都心環状線三宅坂JCT―霞ヶ関1.4 km、10月1日に都心環状線浜崎橋JCT―芝公園1.4 km、3号渋谷線渋谷4丁目暫定出入口―渋谷1.3 kmが開通している。

### オリンピック道路

環七通りは関東大震災復興計画の一部として計画が始まり、一部建設されたが、戦後は放置されていたものを、オリンピック道路として整備が行われることとなり、羽田空港、駒沢競技場、戸田漕艇場などを結ぶ西側区間は1964年までに開通した。

その他オリンピック道路とされたのは、戸田漕艇場への道として整備された笹目通り、新目白通り、練馬川口線などであるが、23件の強制収用を経て、用地買収が完了したのは1964年3月である。

### その他の道路

江戸の五街道の起点、そして現在に至るまで日本の道路の起点であり道路元標が設置された日本橋は、1963年、武骨な首都高速道路の高架橋が覆いかぶさり、橋の下の薄暗い古めかしい石橋になってしまった。こんな状況に対しても、当時は過去を捨てることは良いことという価値観が支配的で、疑問を持つ人はわずかだったのである。

1964年8月27日には都心の目の前ながら渡船で渡っていた佃島に佃大橋が開通、渡船が廃止され、千駄ヶ谷では、国立競技場と代々木競技場、選手村を結ぶ都道が仙寿院の墓地の真下を貫いて建設され、大変話題になっている。

また都内の街路樹の本数も飛躍的に増やされ、1965年には約11万2千本となっている（東京都建設局、2017）。

### 住居表示法

住所、住居表示とは、都市空間のあらゆる地点

を把握可能とし、人々の移動を容易にするために設定されているものであるが、1962年には「住居表示に関する法律（住居表示法）」が施行され、江戸、明治以来の伝統ある地名多数が改変、消滅させられた。

たとえば、原宿は神宮前に、御徒町は台東、東上野に、角筈は新宿、西新宿、歌舞伎町に、淀橋は西新宿に、芝田町は芝、三田に、芝汐留は東新橋に、芝田村町は新橋、西新橋に、麻布霞町は西麻布、六本木に、麻布谷町は赤坂、六本木に、麻布筆筈町と麻布鳥井坂町は六本木に、赤坂青山高樹町は南青山に、赤坂溜池町、赤坂一ツ木町は赤坂に、菊坂町は本郷に、駕籠町は本駒込、千石に、といった具合に改変された。田町、田原町、稲荷町などは駅名に、高樹町、谷町は首都高速道路のジャンクション名に残るだけである。

また小さい町は広域の町に統合され、1丁目、2丁目などと数字に置き換えられ、町名が消えた。その中には樋口一葉、夏目漱石などの文学の舞台として知られる本郷の菊坂町、森川町なども含まれ、本郷4丁目、6丁目などとされた。

住居表示法には「町」を省くことも決められていたため、例えば文京区の西片町は西片1丁目、2丁目とされ、片側町という町名の由来がわからなくなってしまった。ただ、有楽町も有楽〇丁目と改変されることになったものの、反対運動が起こり、例外として有楽町の名が残っている。

神田鍛冶町、神田三崎町、神田猿樂町、芝田町なども、神田、芝を消すこととなったが、地元は反発、神田神保町、神田鍛冶町などが古い地名をそのまま残した。

こうした改変の背景にあったのは、江戸城下町を受け継いだ東京の町が大変に複雑でわかりにくく、配達などの効率が悪いということもあるが、さらに当時は、古い、伝統的なものを否定する考え方が強かったことがあった。

さらに、オリンピックを控え、町名や住所表示も外国人にわかりやすい「合理的」なものに変えなければならないという機運も広まっていたのである。

## V. オリンピックまでに

こうしたインフラのうち競技施設、会場周辺や会場への道路、ホテル、空港などはオリンピック開催に必要なものであるが、他方地下鉄となるとさほどの関連性は認められないし、東海道新幹線となると、直接の関係はほとんど無い。まして開会直前の9月に上野に開館した、人食い鮫も見られる「東洋一」の水族館となると、オリンピックとは全く無関係である。

住居表示が外国人にわかりにくいといっても、東京中、日本中の住所を変える必要があるとはとても思えないし、まして電話番号となるとオリンピックとはまったく無関係のはずだが、2桁だった東京の電話の市内局番を3桁化したのは、何と「ニューヨーク並み」を目指したためなのである(泉, 2004)。

こうした東京改造に必要な経費は、開催に直接かかわる国立競技場などの施設整備約164億円、大会運営費94億円、選手強化費用23億円に加え、都市整備から新幹線建設まで、国家プロジェクトとして巨額の国費が投じられ、民間の投資も巨額に上っている。

これは1つには敗戦の焦土から再出発し、復興を遂げ、さらに経済高度成長を驀進中という時代背景があった。さらに「アジアで初のオリンピック」ということで、国中がオリンピック一色といってもよいような熱気に包まれる中、直接オリンピックにかかわるとは思えないものまで、すべてを「オリンピックまでに」「外国人に見られて恥ずかしいように」と、猛烈な勢いで進められたためである。その結果人々の東京での生活は、移動から娯楽まで大きく変化することとなったのである。

## 第2章 東京オリンピックと浄化運動

### I. 環境問題への対応

#### 大気汚染

日本では殖産興業の明治時代から大気汚染は発生しているが、経済高度成長が続いた昭和30年

代には、重化学工業化が進められ、車の数も増加し、太陽が赤く染まり、正体不明の悪臭が東京を包んだりするなど、大気汚染は深刻な状況となった。当時は「公害」「大気汚染」といった概念自体あまり一般的ではなかったが、かつての「美しい日本」と対比し、環境の変化を嘆き、反発、反対する人々も多かった。

ただ、国政も地方行政も規制にきわめて消極的で、研究が進んだのも遅く、東京、川崎の大気汚染の研究による「大気汚染気象ハンドブック」が出版されたのは1965年、学術誌『大気汚染研究』の創刊も1966年である。公害対策基本法制定は、オリンピック後の1967年、大気汚染防止法は1968年である。反公害の世論が大いに高まり「公害国会」で大幅な法改正が行われたのは1970年だった。

こうした中でオリンピックを控えた対応策は多くなく、東京都公害防止条例制定は1949年だが、国の「煤煙の排出の規制等に関する法律」制定はオリンピックを前にした1962年であった。

#### 河川浄化

経済高度成長期の当時、家庭やどぶの排水から工場排水まで、汚れた水の多くは川に流していた。またごみ、廃棄物も川にさかんに投棄されたから、「ゴミで埋まる都内の川」で「運搬船も立ち往生」という状況だった。

実際「死の川」と呼ばれた隅田川は、悪臭が酷く、水上バスの乗客は激減、川辺は近づきたくない場所で、ウォーターフロントどころではない状況だった。

こうした中、過去の美しい、風情溢れる隅田川の風景を懐かしみ、取り戻したいという思いは強かったが、当時は、都区市内でも下水道はまだ完備しておらず、工場排水規制も緩く、抜本的対策は困難だった。そこで取られた対策が「くさい隅田川」押し流す 荒川の水40万トンで けさ第1回テスト。」(朝日新聞, 1964年9月10日)であり、元を絶つのではなく、大量の水を流して、死の川隅田川の悪臭、ごみなどを一時的に排除するという、オリンピックまでに何が何でも臭いもの



に蓋をしてしまおうという対応だったのである。

### 水洗化

東京の水洗便所取り付け可能な広域下水道は1922年には稼働しているが、オリンピック開催決定後は拡張が進められた。しかし人口あたり普及率は1955年度末には15.62%、1960年度21.3%、そしてオリンピック翌年の1965年でもわずか35.3%だった（東京都下水道局、2008）。東京の普及率が概成100%となったのは、1995年である。全国の水洗化率も1963年9.2%、1973年31.4%、1983年58.2%、1993年75.6%である。つまりオリンピック当時は、まだ臭い、汚い汲み取り式のポットン便所が多く、とりわけ公衆便所となると「暗い、臭い、汚い」の3Kの代表とされていたのである。

こうした状況に対し、読売新聞1964年3月16日の「外人客をむかえる準備」と題した社説では、日本の汚い公衆便所で外国婦人が卒倒した、という話を紹介、さらに、ロンドンでは公衆便所が800人に1か所あるのに比べ、都内の公衆便所は700余か所、12,000人に1か所しかないと危惧し、施設の増設は無理だが、せめてきれいにしなければならぬと主張している。

こんな遅れた状況では、きれいな水洗便所が当たり前のはずの外人にショックを与え、日本について悪い印象を与えてしまう、というわけで、1964年2月には浅草公園、明治公園には「外人向けの豪華版」「国際レストハウス」が建設された。

### ゴミ処理

当時、厨芥（生ゴミ）は収集員が家庭を回って回収し、雑芥（掃除ごみなど）は上部の蓋から入れ、前面の蓋をはずして取り出す形で、路上に多数置かれたコンクリート製、あるいは木製の箱型ゴミ箱に投入されていたが、このゴミ箱が町の美観を損なう、汚いと槍玉にあげられた。

1963年には、「路上のゴミ箱をなくそう」と大都市にモデル地区が設置され、「ポリバケツ」の蓋の密閉性を高めた青い、大型のプラスチック容

器である積水化学工業の「ポリパール」を家庭内に設置し、すべてのごみを投入、保管して、清掃車が来る決められた時間に持ち出して、作業員がごみに触ることなく回収車に積み込むという形に改められた。1963年度末には23区全域で実施され、据え置き型のごみ箱は撤去が進められたのである。

しかし実際は、容器が雑然と置き放しにされ、清掃車も定時に来ず、当時は多かった野良犬がひっくり返し、臭い生ごみが散乱するといった問題が起こっていた。1963年には「河野構想」の「ゴミ箱追放運動」として「新型紙クズ入れ」も登場したものの、今度は捨て場が一杯という問題も発生している。

また回収したごみの処理能力を上げなければならないと清掃工場の建設が進められ、1964年4月1日には足立清掃工場、葛飾清掃工場が完成している。

## II. 保健、衛生

### 食品衛生、伝染病予防

1964年1月、厚生省は「清潔なオリンピックを」と選手に予防接種をおこなうことを決定したが、さらに東京港と羽田空港の従業員、付近住民6万人、盛り場接客従業員、さらにはクリーニング店員まで、18万5千8百人という膨大な数の人々を対象にしたコレラ、天然痘の予防接種を行った。

また、東京都衛生局は、伝染病追放をめざして、ホテル、旅館、選手村食堂、国立競技場に食品納入する業者、主要駅、羽田空港内食品関係者の細菌検査を実施し、衛生優良店にはAマークを表示することを決定、外国人の飲食はAマーク表示の店を勧めることとした。

さらに、赤痢などの防止策としてオリンピック施設に出入りする業者、宿泊施設従業員、一般飲食店員、キャバレー、料亭従業員など32万2千人にものぼる人々を対象に、一斉検便も実施した。

こうした対策は「赤痢のように土着の伝染病が蔓延したらせっかくのオリンピックも海外に恥をさらすことになる。」から（読売新聞、1964年1

月7日)であったが、6月には集団赤痢が相次いで発生、8月には外国人のコレラ患者が死亡、10月には下田でコレラ騒動が発生して死者も出たため、外国人患者の隔離病院を決定している。さらに7月には埼玉県戸田のボート会場付近で「マヒの奇病」が続発している。

### 銭湯

当時の銭湯、温泉などでは木製の手桶が使われていたが、ぬめりが落ちにくく不衛生であるとして、オリンピックを前に保健所が指導し、プラスチック製に置き換えられていった。

今なお広く使われている「ケロリン」桶も、初めて使用したのは1963年、東京駅八重洲口地下の東京温泉である。

### 「国民保健体操運動」

1964年4月、厚生省は最近退化の傾向にあるといわれる都市住民の体位を向上させるためとして、オリンピックを機に「国民保健体操」を作り、8千万人総体操運動になるまで盛り上げる方針を発表した。

また五輪国民運動会議健康増進運動部会は、4月から毎月7日を「健康の日」とすることを提唱、国民に、運動すること、日々栄養と睡眠を十分にとること、そしてスポーツテストに参加し、検診を受けることを呼びかけた。

月別実践事項としても、4月は地域挙げての蠅、ゴキブリ退治、6月は衣服の衛生と虫菌の予防、11月はハイキングなどで自然に親しみ、日光浴をすること、寄生虫の退治、2月は着ぶくれ防止とすることを決めている。

このように、選手、来日客に直接影響する選手村や競技施設、周辺での食品衛生はともかく、銭湯の衛生、ましてや国民の健康、体位向上といったオリンピックとは無関係の、個人の身体にまで国家による統制が及んだのであり、オリンピックを迎えるには、不健康、不衛生が徹底的に排除されなければならないと考えられていたことがわかる。

## Ⅲ. 都市景観の美化

### 看板規制

現在もあまり変わらないが、当時の東京の街には、立て看板、捨て看板が林立していた。またネオンはどぎつい色でチカチカ点滅し、看板は全く統一性のない色、形がばらばらなものが溢れていた。

こうした状況に対して建設省は、1962年、美観を損なう屋外広告の撤去手続きを簡素化し、11月には新小岩、小岩で、初の野立広告強制撤去を行った。1963年には路上の看板野放しを規制することとし、1964年3月には屋外広告物のモデル条例案が都道府県に通達された。東京都も1963年、違反の野立ち広告をオリンピックまでに追放することを決定している。

国鉄も1963年、鉄道施設の広告をすっきりさせようと規制を進め、まさにオリンピックをめざして開業した「夢の超特急」東海道新幹線の場合は、沿線に野立て看板が林立しないよう、特に厳しく法規制まで行われた(後藤、1994)。

また民間でも、東京広告美術協同組合による「屋外広告物保全美化運動」が行われている。

### ビラ、ポスター、貼り紙規制

商業宣伝などのビラが撒かれ、ポスター、貼り紙などが所かまわず貼られている状況に対して、1963年、汚い屋外広告が知事権限ではがせるよう改正法が閣議決定された。

東京都でも警視庁が違法張紙を取り締り、都心のビラを徹底的にはがす作業が行われた。3月には学生アルバイトを雇って「都市美を損なう違反ポスター」の撤去も行われている。4月には汚いビラ9万枚を撤去、10月には目に余るガイドクラブのビラを排除などと、街の美化が進められた。

### 闇市、露店排除

戦後の混乱期には都内各地に闇市、露店が作られ、銀座ではGHQ命令で1951年に廃止されていたが、オリンピック当時都内にはまだ多く残っていた。

こうした露店は、仮設で雑然として衛生状態も治安も悪く、都市景観を損なうと、オリンピックが近づくと排除が進められ、浅草寺境内の場合は1962年に撤去が決定し緑地帯が作られている。

新宿駅東口は闇市の名残が残っていたが、1964年5月に国鉄東口の駅舎が完成している。

新橋駅周辺の再開発も計画されたが、オリンピックには間に合わず、着工はオリンピック終了後で、東口は1966年、西口は1971年に完成、露店も飲食店も、再開発ビルに収容された。

都市は人が作るものであるが、建築物も施設も計画性が無くできてしまった場合は、乱雑で無秩序な空間となる。また計画したとしても、やがて劣化し、変更が進み、乱雑で無秩序な空間となってしまう。こうした戦後混乱期を引きずる当時の東京の街並みは汚い、外国人に見られたら恥ずかしいとされ、統制された都市空間へと作り変えようとされたのである。

### 第3章 公衆道德問題とオリンピック 国民運動

#### I. 「オリンピック国民運動」

##### 1. 官主導の国民運動

オリンピックを控えて、東京の街を改変しようという動き、美化しようという動きとともに、今一つ大変重視されたのが、日本人のマナー、行動を統制し、改変しようとする動きである。

こうした運動の背景にあったのは、当時の日本人のマナーに対する認識である。1964年1月23日の朝日新聞「天声人語」が、「このごろの日本の公衆道德の乱れ方はひどい。自分さえラクなら他人のことは知るものか、という利己主義だらけになっては、いくら経済成長下だろうと技術革新下だろうと、住みよい社会になるわけがない。」と嘆いているように、当時の日本人のマナーは、ごみ投棄、吸い殻投げ捨て、立ち小便、行列しないなど、今日とはかなり異なり、問題の多いものだった。

同年の朝日新聞全国世論調査でも、東京オリンピックを迎え、外国人に見られて恥ずかしいと思

うものとして1) 公德心が欠けている20%、2) 町がきたない(街路、河川、公園、その他)20%、3) 道路が悪い16%、4) 酔っ払いやぐれん隊12%、5) 乗り物の混雑、交通マヒ8%、6) 便所が汚い7%、7) 立小便風景4%、8) 土産物その他の商道德の低下2%、9) その他7%となっている(朝日新聞、1964年4月20日)。

政府、行政はこうした状況を打破すべきとして、官主導で、上からオリンピックの理解、国際理解を進めるとともに、公衆道德、商業道德、交通道德を向上させ、国土美化と健康増進をめざすとする「オリンピック国民運動」を展開した。

中心となったのは、総理府オリンピック国民運動推進連絡会議で、親切、秩序、清潔を共通目標とする公衆道德高揚運動部会、毎月7日を「健康の日」と定め、国民の健康を増進する健康増進運動部会、親善店指定、サービス向上月間設置を進める商業道德高揚運動部会、「高い交通道德でオリンピックをかざろう」をスローガンに掲げた交通道德高揚部会が設置された。

##### 2. 「オリンピック教育」

子どもたちを対象に展開された運動が、「オリンピック教育」である。国際オリンピック委員会では教育を重視し、オリンピック憲章でも委員会の役割として「スポーツを文化や教育と融合させる試みを奨励、支援する」とされており、「フェアプレー」、「努力する喜び」、「他者への敬意」など5項目を「オリンピック精神の教育的価値」に挙げているが、1964年東京大会の場合、政府が音頭を取り、世界初の組織的な教育プログラムが実施された。その中でも、大会への協力機運を高めることとともに重視されたのが、公衆道德を高めることだった。

4月には文部省が、学校生活を通じて生徒のオリンピック意識と道德的な自覚を高めるよう積極指導を通達し、『オリンピック読本』を制作している。中高生向けの読本ではオリンピックの歴史やスポーツマンシップの大切さも挙げられているが、小学生向け読本に見られるように、「自分の家や学校、道路などを清潔に」、「姿勢や歩き方を

正しく、「交通規則を守る」などが強調され、さらに「日常生活も（外国に）報道されることでしょう。わたしたち、ひとりひとりの責任はひじょうに重大です」と外国人の目を意識したマナー教育が推進されたのである。

## II. 美化運動

### 1. ごみ問題

当時の日本人のマナーは現在とは比較にならないほど悪い状況で、オリンピック2年半前の1962年4月15日の朝日新聞「天声人語」は、「公園も汚い。駅の待合室も紙くずだらけ、行楽客の乗った列車はゴミ箱をひっくり返したよう。なんといっても公衆道徳、公德心が足りない。」とし、日本人は「神州清潔の民」などとは気恥ずかしい「不潔の民」だと嘆いている。

実際この年のメーデーでも東京六大学野球でも、終了後はごみの山になることは必至と、メーデー会場では大きなごみ穴を掘り、球場ではごみは拾って出口の屑籠へと、必死の呼びかけが行われたのである。

毎日新聞も1963年7月1日、東京の顔である銀座の街も汚れ放題で、「歩道はごみの山、通行人のごみのポイ捨てや住民が路上にぶちまけた台所の残り物が散乱」という状況を批判している。

1964年4月5日の朝日新聞「平気でゴミ捨てる都民」という記事も、当時の東京の街の汚さを「道には、たばこの吸い殻や空き箱、チューインガムなどが捨てられる。特に有楽町駅付近の汚さはひどい、毎朝掃除しても昼にはゴミの山、歩道のはしには紙屑や吸い殻が風で吹き寄せられ、日劇よりの一角には近くの店から持ち出されたきたない木箱が積み上げられて悪臭を放つ。スシ屋横丁側の線路沿いの道では、飲食店やパチンコ店がゴミを遠慮なく道路に掃き出している。野菜くずや魚の頭、縄の切れっぱし、氷のかけらなどがぐちゃぐちゃになって道の端にたまっている。ごみの容器もあちこちの町かどに雑然と積まれているが、フタの無いきたないのが大部分だ。上のほうの紙屑などが風で飛んで、あたりの道を汚している。」と描写している。

明治の日本人の列車内のごみ処理のマナーも、夏目漱石が『坊ちゃん』の中で、熊本から東京に向かう列車の窓から、主人公が弁当の食べ殻を放り投げたと書いているようにひどいものだったのだが、1963年当時でも、8月13日朝日新聞「天声人語」によれば、電車の窓から投げ捨てられたビールの空き瓶が車内に飛び込んで乗客がけが、車外に投げ捨てられた瓶が頭に当たり頭骨骨折、ジュースの空き缶が当たり踏切警手が頭に裂傷、ジュースの瓶が保線職員の顔に当たり数針縫うけが、といった事故が多数発生している。実際当時の列車内にはしばしば「旅のエチケット。窓からあきビン捨てないで下さい」などと書かれていたのである。

### 2. 「国土美化運動」、 「首都美化運動」

こうした状況に対して、オリンピック国民運動の中で強調されたのが国土の美化である。「国土美化運動」は全国的に展開され、早くも1959年には標語募集が行われ、1962年、1963年には国土を美しくしようと呼びかけるキャラバンが行われた。

1964年4月には厚生大臣が、国土の美化より、ごみ、チリの無い清潔化運動の方が先決と、婦人、青少年団体、ボーイスカウトなどの奉仕を呼びかけ「国土浄化運動」を進めている。

開催地である東京都は「首都美化運動」を推進した。1962年には首都美化運動推進本部を設置、「首都美化は五輪の一種目」をスローガンに、河川浄化、ごみ対策、吸い殻対策、道路不正使用占拠、街路樹、公衆便所、列車便所改良などを進めることとした。

同年12月には都主催の「東京を美しくする展覧会」が開催され、毎月10日を「首都美化デー」とすることを決定、第2回の1963年1月10日には目抜き通りで清掃パレードが行われ、銀座4丁目を大掃除した。以後1963年7月は池袋駅東口一帯を、8月には「清掃機動隊」を投入して、上野、渋谷駅周辺を大掃除、9月は隅田川など、10月は新橋駅付近、11月は道路、1964年5月にはごみ入れ袋の配布、重点地区の大掃除などが行わ



れている。

参加者数も増加し、1962年12月10日の第1回は「反応さっぱり たったPR不足」と報道されていたが、1964年1月には「百万人の清掃作戦」のはずが、都庁前では知事も箒を手に参加し、陸上自衛隊、小中学校に加え、新生活運動競技会、ラジオ体操連盟、町会など民間約200団体も協力、上野公園など都内各所で「二百万人が清掃運動 寒風の中、自発的に 広がる首都美化デー」、「五輪の町」をきれいに ホウキ手に200万 美化デー、新記録の動員」の一大イベントとなった（読売新聞、1964年1月10日）。こうして1964年9月には「“首都美化”は五輪の一種目」と呼ばれるような大規模な運動へと発展したのである。

1963年3月には「首都美化協調旬間」も設定され、1963年10月1日には「都民の日」の行事として「一千万人の大掃除 都民総出でゴミ追放」運動が行われた。

また1963年1月には都は「清掃110番」を設置し、道路、空き地、川などにごみの山が出来ている場合は「機動処理班」が出勤する態勢を取っている。

各区でも同様の取り組みが行われ、たとえば台東区では、1963年、独自に毎月1日、20日も美化デーとし、月に3回、区長が駅前、市場などを巡回、上野公園の掃除などを行った。また町の美化の音頭取りとして協力委員3,000人を委嘱している。世田谷区でも1964年1月に「オリンピックまでにはきれいに」と美化推進協議会が発足している。

警察も違反の摘発を進め、1963年2月には「美化違反」で107人を検挙、7月には川を汚す人を摘発、8月には隅田川のごみ捨て取り締りも行われている。

### 3. 民間の運動

民間でも日本人の「公衆道徳の悪化」に対して問題意識が広がり、官主導の首都美化デーへの協力に加え、メディア、企業、新生活運動協会、町内会、婦人会など民間でも多くの運動が展開され、

1962年12月には、ボーイスカウトが首都美化運動に協力して、美化運動を開始している。

1964年1月にはごみ一掃めざして読売新聞、報知新聞、日本テレビ、新生活運動協会主催で「国土を美しくするのは日本の信用問題。オリンピックの年を迎えて、外国のお客さんに見せて恥ずかしくないよう町を美しくしましょう」と美化標語が募集され、「チリーつ拾う心に金メダル」が選ばれている。

同年3月には「ゴミに埋まった日本 役所に任せておけぬ」と各地で地元民が立ち上がり、台東区の婦人会もくずを売って防犯灯を設置する運動を始めている。6月には大学生が歩行喫煙をやめようという美化運動を始め、8月には目黒駅周辺で町内会が駅前を美しくする運動を推進した。

当時は野良犬が多く、飼い犬でも放し飼いにされている場合も多く、犬の散歩の際に糞を始末するという習慣はなかったから、犬糞がかなり落ちていた。無論当時の日本人は、江戸の町もヨーロッパの多くの都市も犬の糞だらけであることなど知らなかったのだが、板橋ではこうした状況がみともないと1964年8月、犬の糞を一掃しようという運動が起こっている。

### 4. 「花いっぱい運動」

「花いっぱい運動」の場合は、民間の提唱したものを行政が取り込んだ例である。提唱者は松本市の小学校教員小松一三で、終戦後間もない1952年、町が荒廃し人々の心にも余裕を持ってないからと「社会を美しく・明るく・住みよく」し、花を通じて人々の気持ちを豊かにしようと提唱したのである（松本市公式ウェブサイト、2017）。

これを1956年には千代田区長が取り入れて「みんなが花咲じいさん」と提唱し、さらに1959年には、文部省がオリンピックまでに花をいっばいと推進することとなったのである。

こうして1963年渋谷駅前で植栽をアオギクに植替えるなどが行われ、1964年には、オリンピック期間中に道路を飾るための花20万株が長野で栽培され、東京に贈られたりしている。

経済高度成長で東京近郊では住宅地開発が進み、雑木林、山林、川など昔からの風景が破壊され、失われていく中で、こうした運動が高まったのである。

### Ⅲ. 人々の行動統制

#### 1. 喫煙マナー

1964年4月5日の朝日新聞は「有楽町駅も紙屑や吸い殻で昼頃には汚れ放題。朝のうちにすっかり掃除をしてもラッシュが終わるともとのモクアミになる。灰皿32、屑籠が50近くあるが、入る人は半分もなく、灰皿からは毎日石油缶2杯の吸い殻が、ホームや線路からは5杯出るという。チューインガムのかすは最も困りもので、数日おきにヘラで掻き落とすが、大きなチリとり2杯分もとれる、と嘆いている。」が、当時は男性の多くが喫煙者で、都内の喫煙人口は320万人、吸い殻は一日5,216万本で、その多くが投げ捨てられていたのである。

禁煙は「国電」と呼ばれた山手線、京浜東北線、私鉄では地下鉄や東横線、井の頭線など都心と近郊の通勤電車だけである。他に大阪近郊の通勤電車なども禁煙だったが、それ以外は、全国どこでも列車内の喫煙は自由で、禁煙車、喫煙車などという区別もなかった。駅構内、ホームも、禁煙どころか喫煙場所の指定もなく、ホームは吸い殻だらけ。とりわけ掃除ににくい線路上は白い吸い殻が他のごみとともに一面に広がり、雨が降れば溶けるという惨状だった。当時の駅員は、長い柄のほうきと「鉄道ちりとり」を持ち四六時中ホームの吸い殻掃除を続けていたのである。

飲食店も映画館も禁煙などと言うところはなく、まして街中は歩きたばこも自由だったから、どこもかしこも吸い殻だらけ、たまに設置されている吸い殻入れからは白煙が上がり、火災原因の1位がタバコといった状態だった。分煙が始まり、公共の場所は原則禁煙などとなったのは平成以降のことである。

こうした状況に対して1963年、吸い殻を一掃しようと全東京ライオンズクラブが都へ収集車4台寄贈、荒川区では吸い殻一掃に向けて吸い殻容

器作りに乗りだし、中野区では、中野をきれいにと、吸い殻入れとフラワーボックスの設置を進めている。

#### 2. 飲酒マナー

町を酩酊して歩き、嘔吐し、といった酔っ払いとは今日も変わらないが、かつては長距離列車はもとより、常磐線などの中長距離通勤列車でも、昼夜とも車内で酒を飲む人は多かった。特に夜間はクロスシートで酒盛り、中には床に車座になって酒盛りなどという乗客も見られたほどだったが、当時はこうしたことはさして問題とされることはなかった。

#### 3. 整列乗車

現在東京では当たり前に行われている「整列乗車」は、戦後混乱期の1947年ごろ、営団地下鉄（現東京メトロ）渋谷駅で、ラッシュ時のトラブルを心配した駅長が、整列乗車の方法を書いた紙を体の前後に吊り下げてホームを巡回したのがきっかけで始まったとされる（営団地下鉄、1991）。

また原田勝正は、戦争中旅行制限で人々が身に付けたルールが、切符を買うとき、列車に乗るときに並ぶことだったと述べている（原田、1998）。

しかし実際には、すし詰めの「殺人的ラッシュ」が日常だったオリンピック当時は、殺気立った乗客たちが乗車口に殺到といった光景が見られ、今日のような整然とした整列乗車が当たり前になったのは、ずっと後のことである。

#### 4. 駅、列車内のマナー

当時長旅の列車内では、タバコの煙が充満する車内で酒盛りというのはごく当たり前の風景だったが、年配の女性乗客の中には和服で座席の上に正座している人がいたり、男性乗客の中には下着であるステテコ姿という人もいた。これに対して、1959年「ステテコ姿禁止」の「エチケット列車」が実施されたりしている。

#### 5. ホテルマナー

ステテコ姿は、その後「農協さん」が海外団体

旅行に繰り出したバブル期にも、海外のホテルで批判的になっているが、東京オリンピック当時となると、国内旅行でもホテルに不慣れな人は多かった。1964年3月19日の毎日新聞には、日本人宿泊客の酷いマナーを紹介する従業員の声が「寝間着にスリッパでロビーをウロウロする人は減ったが、絨毯に唾を吐いたり煙草を捨てて焦がしたり、ロビーの椅子で足を開いて高いびきで昼寝したり、ひどいのは酔って従業員に絡む客もいる」などと紹介され、みっともない行為をやめるよう、強く呼びかけている。

#### IV. 逸脱行動と取り締り

##### 粗悪品、インチキ商品、飲食店

当時ホテルや飲食店のサービスは低質で、消費者利益保護といった考え方はほとんど存在しなかったため、インチキ商品、粗悪品、不当表示などが氾濫していた。たとえば1964年9月にも混ぜ物をした牛乳が「国辱になりかねぬ薄い牛乳」と指弾されている（読売新聞、1964年9月3日）。

1964年2月21日の朝日新聞社説「商業道徳を高めよう」では、このような粗悪品や見本と違うものを売りつけたりすれば、外国人の「日本の評判は一度に落ちてしまう」と危惧、アメリカでは消費者の利益擁護が進んでおり、「アメリカ政府を見習うべき」と主張している。具体的には牛肉缶詰が実は馬肉、天然果汁と称するジュースが実はブドウ糖、外国人とはあまり関係がなさそうなものでも、魚の名がウソとか、不動産広告の駅から10分が実は徒歩ではなく車だったなどといった例を挙げている。

バーなどの飲食店でも、料金表が無い店を一掃しようと警察の査察班が目光らせ「ビンビン検査」が行われた。

##### 運転マナーと交通事故対策

当時は、排気ガス規制も騒音規制もほとんど無く、汚く臭い排気ガスをまき散らし、クラクションで互いを威嚇しながら先を争って走るのは普通のことだった。経済高度成長期で、速いことは良いこととされ、東海道新幹線が疾走し始めた当時、

登場したばかりの高速道路では、高速道路だからどれだけ速く走ってもかまわないと考えて突っ走り、つかまっても反省もしないドライバーが多数いたのである。また、「マイカー」を所有する人は特別な人という意識もあり、歩行者を虫けら同然に蹴散らし、ごみを投げ捨てるのは茶飯事で、車から立木、岩めがけて瓶の投げ比べ、カーブミラーを破壊するなどが日常的に起こっていた。

なにより問題だったのは交通事故の多発で、当時はひき逃げ事件で毎日30人が死傷という、まさに「交通戦争」だったのである。

このように交通道徳が低く、スピード違反、酔っ払い運転、無免許運転、ひき逃げなどが毎日の新聞をにぎわすようでは、オリンピックを開催する資格がないと危機感が広がり、1964年には「オリンピックに備え」て欧米各国など69か国加盟の国際道路交通条約に加入し、道交法を改正してキープレフトを採用することとなった。

また警視庁も1964年3月、オリンピックをめざして交通事故防止本部を設置し、4月には警視総監が交通事故防止を最重点にオリンピック対策を進めると署長会議で檄を飛ばしている。開会が近づいた9月には、「世界に示そう ただしい交通」をモットーに秋の安全運動も行われている。

##### 神風タクシー

当時の日本の、とりわけ東京のタクシーは外国人から「神風タクシー」と呼ばれ恐れられていた。つまりマナー以前に、法規も守らぬ乱暴、危険な運転で爆走し、客を選り好みする乗車拒否、挨拶も返事もしないで遠回りするなどと、極めて評判が悪かった。日雇い、ハンドル貸しといった運転手も多く、業界自身が「雲助運転手」つまり札付き悪質運転手が3,000人いると自認していたほどである。

こうした状況に対して、警視庁は1964年2月乗車拒否集中取り締まりと特別パトロールを実施し、オリンピック期間中も悪質タクシー絶滅をめざすとしているが、「雲助運転手」を紹介した1964年3月16日の朝日新聞社説の題名が「外人客をむかえる準備」というものであることから

わかるように、こうした取り締まりも、外国人の目を強く意識したものであったのである。

### 犯 罪

当時は、蛍光灯、水銀灯があまり普及しておらず、電球の街路灯も少なく、今と比べれば町ははるかに薄暗かった。これに対して1964年1月東京都は、「暗い東京の汚名」を返上しようと、オリンピックまでに街路灯を2,800本設置すると決定した。

警察も3月には「五輪に明るい町づくり」をめざして防犯運動を開始し、4月には暴力常習者のリストアップを行った。7月には6週間にわたる犯罪半減運動を開始、8月には非行少年を使ってオリンピック入場券を買い集めたなどとして、暴力団の検挙を進めている。

スリ対策としては、オリンピック開会前にスリを根こそぎにする活動を3月から展開し、8月までに110人を検挙、閉会後にはオリンピック期間中の東京ではスリ封じ込めに成功したと報道されている。

期間中には客引きの取り締まりも行い、「外人観光客にたかる不良客引き」30人が逮捕されたりしている。

### 列車内犯罪

列車内では犯罪も多く、戦後混乱期の1946年には電車内にピストル強盗などという事件があり、1960年には東武電車内で高校生がスケート客を刺し殺すという殺人事件が発生したりしている。1959年には「電車内のパクチ手入れ 十人を逮捕」という事件があったが、1964年6月にも、電車内トバクに最高の罰金判決、といった状況だった。

それゆえ駅、列車内は警察権を持ち、警察官同様に武装した「鉄道公安官」によるパトロールが行われたのである。

### 悪書追放運動

悪書の追放は戦前からあり、1941年には悪書追放の新布石として本の配給を統制する新会社が

設立されているが、当時はそもそも言論、出版の自由が認められていない時代である。

戦後1955年には、市民の間で子どものために悪書追放の世論を盛り上げようという動きが高まり、文壇でも文芸判定委員会が悪書追放を提唱した。

オリンピックが近づいた1963年には、「悪書追放運動」として盛り上がり、書店でも「有害雑誌」を締め出す動きが全国に広がった。10月には甲府、大阪府の書店が有害雑誌締め出しに進み、埼玉では書店組合が決議などと広がり、11月からは小売業連合会が「有害雑誌」を全国で店頭に置かないことを決議。返品運動なども起こり、仕入れ拒否となった雑誌など廃刊に追い込まれたものも出ている。

他方で日本文芸家協会は条例による規制に反対し、出版業界は自主規制を進めることとなり、出版関係4団体が倫理協議会を作り、1964年に入ると5月に出版物自主規制特別委員会が設置されている。

### 女性転落防止運動

東京都民生局は、オリンピックをひかえた都内の風紀問題が悩みの種として、1964年2月から「五輪の風紀を正しく」のスローガンのもとキャンペーンを展開した。

外国人宿舎周辺の風紀を正すとともに、とりわけ女性の転落防止に力を入れ、「女性転落防止啓発キャンペーン」では、若い女性が風俗習慣が違い言葉も通じにくい外国人に接する場合の正しい態度を養うために、パンフレット「みんなで守ろう、助けよう ― 婦人保護の手引き」25,000部が配布された。また親元を離れ上京して働いている20歳までの女性向けとして5万部作成したパンフレット「若い女性の手帳 ― 美しくすこやかに」では、男女交際、純潔、都会生活の誘惑について啓発している。

女性の転落の原因になる家庭生活、社会環境、転落の経過などをまとめ、家庭、社会の重要性を強調した啓発映画「ともしび」3巻の制作、巡回上映も行われ、女性従業員を雇っている会社、工



場などに呼びかけて、2万人動員の講演会を開催、売春対策審議会会長菅原通済などが講演を行った。

今日の感覚ではあまりに神経質と思える内容だが、この「若い女性の手帖」を作成した東京都婦人部長が、オリンピックを控えて女性の転落をいかに強く危惧していたかが、1964年9月7日の朝日新聞「婦人部長の憂鬱」で紹介されている。それによれば、日本の若い女性は「根強い外国への憧れ」があり、「外人は見た目にスマート」だから、「外人でさえあればたちまち信用し」、「相手は浮かれ心」で「あわよくばと下心」でも言いなりになる。実際「外人プレーボーイが誘ったら20人のうち1人しか断らなかった」という。そして「1%がマチガイ犯しても1万人以上。本人の不幸はもちろんだが、日本の女性はすべてそんなもの、と外国から見られかねない。日本は天国と宣伝」することになってしまう、というのである。まさに大勢の外国人を迎えることは「黒船騒ぎ」で、日本女性が外国人にどう思われるか、扱われるかに極めて神経質になっていたことがわかる。

### 風俗業界対策

1964年3月27日の朝日新聞によれば、オリンピックを控えた風俗業界では、「売春、夜の女、暴力バー、トルコ風呂 手ぐすね引く」という状況で、ある「デイトクラブ」は「選手村に近いのだから指をくわえていることはない」と鼻息荒く、英語、フランス語の散らし」を作成、電話ボックスや駅の入り口などに散らそうとしているという。「トルコ風呂」（ソープランド）も当時都内に153軒あり、「ハッスルしている」し、高級売春、外人相手のポン引き、暴力バーなども手ぐすね引いているという。

こうした状況に対して、1964年3月トルコ風呂取り締まり関係機関代表者会議が開かれ、総理府売春対策審議会では、オリンピックの年を迎えて売春をなくす運動を展開することを決定、東京都もオリンピック衛生対策としてトルコ風呂の監督強化を決定している。

また、元非合法売春地帯で小さな酒場が密集す

る新宿ゴールデン街は、7月に厳しい営業規制を受けているし、オリンピック目当てにわいせつ土産品を製造した24人が送検されたりもしている。

### 浮浪者対策

1959年7月14日の朝日新聞には、「浮浪者に悩む東京 オリンピックまでに対策 浮浪者4,180人、仮小屋生活者818軒」という記事が掲載されている。当時は乞食や、終戦直後の混乱期以来の不法占拠、不法建築も多く、立ち退きには大変な手間がかかることが予測されているが、ここでもオリンピックまでに対策を、と主張されている。

1964年3月16日の朝日新聞は、1960年ローマオリンピックでは、乞食といかがわしい女性を市内から隔離したことを紹介し、東京でも、オリンピック開催時には、近県から推定500人の乞食、浮浪者が東京に集まってくるので、施設への強制収容も考えるべきと、ヨーロッパの例を引いて主張している。

### 青少年非行対策

経済高度成長が続く東京への憧れが強まり、戸部離村で若者たちが東京へと集まる時代に、オリンピック開催時は特に、家出少年少女が東京に集まってくることが予想され、実際会期中の1964年10月17日朝日新聞は「聖火台を一目見たいと上京してくる家出少年が増えている」と報じている。

また、銀座にはコットンパンツにVANのアイビーリーグプレザー、ロングスカートで着飾った「みゆき族」と呼ばれる若者が集まり、女性誌も「家出して銀座を歩く少女たち」などと報道し、その行状に社会的関心が高まっていた。こうした若者たちへの対策として警察は補導を繰り返し、9月には2,500人を補導、「みゆき族」も9月19日に約700人が補導され、姿を消している。

### 小暴力追放運動

「小暴力」という言葉は防犯運動の一環として昭和20年代から使われていたが、オリンピック

が近づく 1963 年には、町に小暴力が溢れていると問題視され、東上線では電車内の小暴力が多いからと、通勤客が道徳普及会を結成して立ち上がっている。

こうした小暴力の中には、文字通りの小暴力も含まれていたが、特に問題視されていた小暴力の中身は、実は行列への割込み、バス車内の喫煙といったマナーの悪さだった。

そしてこうした小暴力への対応は、9 月 29 日にバス車内で 2 人の喫煙を発見した運転手が「機転を利かせて交番に横付け」し逮捕、10 月 16 日には行列「割込みの小暴力」を逮捕など、今日の感覚では過剰と思われるものであった。

## V. 好ましい行動の推奨

### エチケット

オリンピックが近づくと、なぜか「エチケット」という耳慣れないフランス語が流行語のように広まった。実際オリンピック組織委員会は、「会場でのエチケットをここのほか気に病み」、「あなたのマナーがオリンピックを成功させる」をスローガンに、空き缶を投げられないように売店での酒の販売禁止を要望し、座布団も投げられないよう固定式とした。また会場では「エチケット七つ道具」としてエチケット袋、ポケット入り灰入れ缶を配布している。

マスコミも、読売新聞 1964 年 3 月 16 日社説「外人客をむかえる準備」が、「外国人は体に少しでも触れられるのを極度に嫌う」。とか、「乗り物に乗るとき婦人優先」のレディーファーストを守らねばならないなどと主張している。

このレディーファーストに関しては、1964 年 8 月 10 日の朝日新聞連載漫画「サザエさん」に、電車内で中年男性が若い女性に席を譲るという、今日の日本人の目には奇異に感じられる場面が描かれているが、これも欧米式のレディーファーストを実践しなければ文明人として失格とされ、盲目的に従うのが当然といった風潮があったためである（清水、2013）。

### 「小さな親切運動」

東京大学総長茅誠司は 1963 年の卒業式告辞で「小さな親切を勇気をもってやっていただきたい。そしてそれが、やがては日本の社会の隅々までを埋め尽くすであらう親切というなだれの芽としていただきたい。」と述べたが、これがきっかけとなり、小さな親切運動本部が発足、6 月に「小さな親切運動」が開始された（朝日新聞、1963 年 3 月 28 日）。

第 1 回小さな親切実行章は、赤ちゃんの帽子を拾って手渡した小学生に贈られたように、この運動は無名の人々による小さな善行に光をあて、過去の日本社会との対比によって、経済、金最優先でギスギスする社会を、かつての人情と優しさがあふれた社会に改変しよう、戻そうとするものだったのである。

## 第 4 章 オリンピックを見る目

### I. 外からの目

#### 来日外国人客

外国人の目を極度に意識した当時、来日外国人客数も大変過大に見積もられていた。観光事業審議会は 1964 年の来日外国人を 55 万人、うちオリンピック見物客が 13 万人との予想を発表した。しかし、実際にオリンピックで来日した外国人は 50,662 人、そのうち 9,199 人は大会関係者で、観光客はわずか 41,463 人だったのである。

そもそも観光客数が予想の 3 分の 1 以下で、さらに小遣 1 日 500 円、「超特急」（新幹線）も 2 等、などと報道されたように、当時の日本人の、外国人＝金持ちという想像とは異なって、外国人の観光は地味で、オリンピック商戦はまさに「あてはずれ」だった。

外国人などほとんど訪れない地方都市となるとなおさらで、「ゲイシャガール」と「フジヤマ」しか知らない「青い目のお客さん」がどの程度「自分の目で日本の現実をたしかめうる機会」になったのかははなはだ疑問、という結果だったのである。

### 外国人による評価

オリンピック自体に対しては、東西冷戦の時代であるにもかかわらず、モスクワ放送が、「主催国の努力」を称賛し、アメリカ大統領もオリンピック選手との昼食会で日本を称賛している。

また日本メディアも、日本を見た外国人の評価として、1964年10月4日朝日新聞は「TOKYOの評判記 外人記者の報告から」という記事で「新幹線 地下鉄に驚き」としているし、1964年6月22日には「西独記者が見た五輪東京 躍動ぶりにおどろく」などと、外人による経済高度成長路線を慕進する日本への称賛を報じている。

無論外国人といっても様々で、実際ラテン諸国では不評で、計時から集計まで機械化が進められ、秒刻みで詳細に決められたタイムスケジュール通りに進められる厳密さが裏目に出て、あたかも空想科学小説のようで、融通性がなく非人間的といった印象を与えるとされた（朝日新聞、1964年12月9日）。

各国選手が入り混じり交歓した閉会式で、日本選手団だけが整然と行進したことに對しても、集団の組織力にはすぐれているが個人的イニシアティブは取らない国民、さらには国粹主義のデモンストレーションのようだという批判もあった。

観衆に対して、慇懃だが冷淡で、儀式を見ているロボットのようだという評価が見られた。プレスセンター通訳のハンス・J・シュナイダーは「誇らしげな日本人の顔」も印象的だったことをまず指摘し、他方で大声、拍手、口笛で応援するのは外国人ばかりで、日本人観衆の「物静かで係員の指示によく従い、行儀のよい」、「つつまじやかな」態度が印象的だったと述べているが、日本人は野球の応援では熱狂することも指摘し、外国人観客とともに観戦するオリンピックという慣れない国際的舞台で、場慣れせず、緊張のあまり、よそ行きの態度だったのではないかと指摘している（朝日新聞、1964年10月13日）。

## II. 内からオリンピックを見る目

### 発生した問題

開会前の10月5日に早くも5,000人が金網越

しに選手村を見物しようと訪れ、13日曜日には「外人のサイン目当て」に2万人が殺到、22日には選手村が見たいと酔って侵入した男が逮捕されている。

オリンピック期間中「五輪気分」で補導された少年少女は67人、東京駅、上野駅で保護された「五輪家出」少年少女は580人に上っている。

また、10月5日には銀座のバーに繰り出したオーストラリア選手があまりの高額請求に驚き、苦情を申し出たため、警視庁がバーに警告を出している。

### 盗難と贈り物

10月6日にはイギリス人記者がホテルで7万円余り、外国人通訳のアパートではテレビなどが盗まれている。7日にはニュージーランドの役員のカメラなど2万円相当、13日には外国人客がカメラ、22日にレスリングコーチが8mmカメラ、11月2日にも帰国間際のモンゴル選手の持ち物が、それぞれ盗まれた。また、選手村内でも22日、27日に盗難事件が発生している。スリの被害は19日に「五輪客スリ被害第一号」が発生し、韓国人社長が12万円、20日にはアメリカ人見物客も被害にあっている。

ただ、カメラを盗まれた被害者には同型のカメラが贈られ、帰国間際に被害にあったモンゴル選手には次々とプレゼントが贈られた。

外国人の忘れ物、落とし物では、9月27日にソ連選手が鞆を紛失、10月11日デンマーク人が入場券を置き忘れ、23日にはマラソン優勝のエチオピアのアベベ選手が皇帝下賜の金の指輪をなくしたが、いずれも見つかっている。

特にタクシーは、9月29日韓国記者がカメラ、10月10日外国人客が忘れ物、ユーゴ人が6万円、13日にはイギリス選手が忘れ物を、それぞれ置き忘れていたが、いずれも「親切運転手」、「正直運転手」が届け出て、無事持ち主に戻されたと報じられ、とりわけイギリス選手の場合は「たった2時間で戻る」と強調されている。

### 観衆の態度

聖火リレーでは、10月3日に名古屋の聖火歓迎式で聖火に群衆が殺到、5人がけが、貧血、という事故があったもののおおむね観衆のマナーは良く、都心入りした8日には「観衆のマナー上出来 ホットした警視庁」という記事が掲載されている（朝日新聞、1964年10月8日）。

### 自己評価

オリンピック閉幕後の1964年10月25日朝日新聞社説「オリンピック大会の成果」では みごとな大会運営が日本人に組織力、実行力がある事を示し、自信を与えたと高く自己評価している。

1964年10月24日朝日新聞「オリンピック東京大会 日本人の心に残したもの」でも、「戦後日本民族のエネルギーが初めて一つの行事に結集され」、「今回我ながらすさまじい活力があることを実感として知った」と総括している。具体的には、「大人は気負い、外国人に見られて恥ずかしくないようにと関係者を急き立て、いらだたせ」、「6月から8月ごろの東京はすさまじかった。競技施設、高速道路、オリンピック道路、地下鉄、モノレール、マンモスホテル建設が一斉に追い込み」新幹線を作り、道路を拡幅した。さらに橋の下から浮浪者を追い払い、道端に花を並べた。その当然の結果として、外国人の評価は素晴らしかったのだというのである。

## Ⅲ. 外国人の目への意識と「国を挙げて」への抵抗感

### 国家行事への抵抗感

オリンピック開催を前に日本全国を回る形で実施された聖火リレーに対して、仙台では、ダダカンこと糸井貫二というハプナー（ハプニングを起こす人）が聖火を見て興奮し、そのまま銀座通りへ赴き、聖火ランナーを真似て全裸で走るという事件が起こった（竹熊、2007）。加藤好弘の主宰する「ゼロ次元」というグループは、聖火ランナーに扮装して最終走者から聖火を奪い取り、そのまま聖火台をめざして突進するという企てを計画していたが、沿道で聖火ランナーを待ち構え、ラン

ニング・パンツの格好になって飛び出そうとした瞬間に、私服刑事らしき一団に押し戻され、未遂に終わったという（秋山、1985）。

小林信彦は、オリンピック騒ぎの騒々しさが嫌だとオリンピックを呪詛し、「東京の町殺しはここから始まった」とオリンピックという国家行事への抵抗感を表明している（小林、2002）。

### 美化運動への抵抗感

美術家赤瀬川原平は、画家高松次郎、中西夏之とともに「ハイレッド・センター」を結成し、「首都圏清掃整理促進運動」というパフォーマンスを展開した。つまり、オリンピック開会7日目の10月16日、銀座の街に白衣にマスク姿で現れ、はたきをかけ、路上の微細なごみをピンセットで集め、たわしや雑巾で磨く、というパフォーマンスを演じたのである。名目はあくまで掃除であり、警察も手を出せない形で、美化運動をパロディー化し、東京中、日本中が上からの指示で、一斉に同じ目標に向かって統制されることへの反骨を示したのである（赤瀬川、1994）。

高松も、ハイレッド・センターの頃とその後の変化について、のちに座談会で次のように語っている。「60年代後半になりだすと、高度成長でどんどんいろんなもののあいだに関係ができてきて、いろんなことが整理され始めて、で、やりにくくなってくるという、その前段階の社会状況ってやつが、あったような気がする」（高松、1994）。

すなわち赤瀬川、高松らにとって、オリンピック開催にあたって広がった、街をきれいにしようという動きは、まさに「いろんなことが整理され始める」つまり人々の日常生活に至るまで、あらゆるものが統制されていく息苦しさを感じさせるものだったのである。

### 大岡昇平の批判

作家、仏文学研究者、評論家で当時55歳の岡昇平は、「スリ取り締めりはたいへん結構だが、ミユキ族追放なんてことに、あまり力を入れる必要はない。ああいう連中はどこの国でもいるもので、もし東京にいなかったら、日本は一人前の民



主義国ではない、といわれるだろう。」と過剰な統制、排除に警鐘を鳴らした。

さらに「外人に対して恥ずかしい——これは終戦以来 20 年、外国屋やエチケット屋が繰り返してきたセリフだが、外国人だって人間である。われわれとそんなに構造を異にしているわけではない。われわれは、わが国の気候風土にかなった生活様式を身につけているだけで、それがヨーロッパと違うからといって笑うなら、笑うほうが間違っているのである。外国語なんか、うまくしゃべる必要はない。これだけ歓迎の準備を整えたのである。お客様は、主人側の使う片言くらい、わかろうと努力するだろう。」と外国人にどう見えるかを過剰に意識する日本人に疑問を呈している（大岡、1964）。

#### 中野好夫の批判

オリンピック期間中東京から「逃避」し那須で過ごしていた英文学者、評論家で、当時 61 歳の中野は、「オリンピック逃避行」の中で、「これだけの金、これだけの努力が、もしこの十年国民生活の改善、幸福の方向へ向けられていたら、どんな結果が生れていだろうか。東京の水キケン、糞尿地獄などは、もちろん苦もなく解消していだろうし、全国にわたる交通戦争だって、相当以上に緩和されていたはずだ。」と膨大な予算がオリンピックにばかり集中されたことを批判している。

また、1962 年から 1978 年まで、花火大会、早慶レガッタが中止されるほどに水質悪化が激しかった隅田川についても、もし隅田川近辺に競技場があったら、外国人を気にして隅田川の浄化がされただろうと皮肉を述べている。

こうした外国人への過剰な意識について、日本人は「外国に見せる、見てもらうということになると、不思議な能力と想像もつかぬ努力を傾ける国民」であるとし、「とにかく不思議なのは、外国人の思惑に関してはステテコ姿まで気にするくせに、なぜ当の国民自体の思惑に対しては痴呆的なまでに風馬牛（注：無関心）なのだろうか。」と、外国人の目への過剰な意識を批判している（中野、1964）。

#### 奥野健男の批判

文芸評論家で、当時 38 歳の奥野健男は、小学生時代を振り返り、1940 年、戦争激化で中止された紀元 2600 年を記念した東京オリンピックに際し、「修身や体操の時間ごとに、日本人の公徳心のなさ、たとえば観客席に紙くずをちらかして帰ることを世界の最優秀民族である日本人として外国人に対しては恥ずかしいと繰り返し教えこまれた。」また、「オリンピックは太平洋戦争のナショナリズムとオーバーラップしてぼくたちには記憶されている。ぼくたちがオリンピックに複雑な気持ちを持つのは当然であろう。」と述べ、外国人と対比して、自民族中心的なアイデンティティが強調されることは、過剰なナショナリズム、戦争へとつながりかねないとの危惧を表明している（奥野、1964）。

### 第 5 章 ソウル、北京オリンピックと行動統制

#### I. ソウルアジア競技大会、ソウルオリンピック

##### 上からの運動

オリンピック開催に際して外国人の目を過剰に意識し、衛生、美化、マナーなどを上から改変させようとする動きは、日本だけではない。

韓国では 1986 年 9 月 20 日～10 月 5 日アジア競技大会が開催されたが、その際ほとんどが官製の、上からのイメージアップ作戦が繰り広げられた。内容は、大会中、銭湯をはじめ練炭、セメント工場などの「公害企業」の操業中止、営業時間短縮から、街の美観を損ねるものをすべて撤去せよというものまで、幅広い統制が行われた。

飲食店の改善運動では、客室から台所が見える方が衛生的であるとして、32,500 か所の調理場をオープン形式に切り替えさせ、1 万店に注文された料理を 1 人分ずつ皿に盛るように変更させ、残ったキムチは捨てて次の客に出させないなどと、極めて細かい統制が行われた。

トイレの改善では、51,200 か所のトイレに洗面台を作り、せっけん、タオル、紙を備えさせている。

こうした指導の目標達成率は 85～95%にも上っ

たが、それは市のパトロール隊の指導に従わないと営業停止もありうるという厳しいものだったためである。

### 先進国並みをめざして

一般市民の日常生活に対しても「秩序 親切 清潔」を標語にした「アジア大会市民参加運動」が展開され、「秩序は一国の国民の民度を図る物差しです」、「正しく歩こう」、「正しく運転しよう」、「吸いがらや紙くずを捨てない」、「青少年を善導しよう」などと呼びかけた。

また、裏道を自発的に掃除する運動、アパートのベランダに花を飾ったり、壁のペンキを塗り直す運動、地下鉄やバスの整列乗車運動など、日常生活の細部にまでわたる運動が展開され、「明るくあいさつしよう」と挨拶の仕方まで統一しようとしたのである。

こうした人々の行動を細かく統制しようとする試みは「86（パルク＝アジア大会）は踏み石、88（パルパル＝ソウル五輪）は跳躍台」というスローガンが掲げられたように、アジア大会、オリンピックを成功させ、人々に先進国民という意識を持たせるまで改変しようとすることをめざすものだったのである。

## II. 北京オリンピック

### 上からの運動

北京オリンピック（2008年8月8日～24日）を控え、中国でも上からの運動が繰り広げられ、大気汚染対策として車両規制、交通対策として交通整理のボランティアが動員された。

マナーに関しても、運転マナーの向上が呼びかけられ、人が2人並んだように見える毎月「11日」を、「列に並ぼうデー」として、「ラインに沿って電車を待ち、並んで乗車しよう。降車後に乗車しよう」と呼びかけるなど、公共交通機関で整列乗車が進められ、バス停の割込みは「文明乗車監視員」が監視した。

エスカレーターでも、右側に立って、急ぐ人のために左側を空けるよう指導員が目光を光らせた。

痰吐は全国政治協商会議で「公害」に指定、オ

リンピックまでに撲滅するよう提唱され、北京市では最高50元（約800円）の罰金とされた。

商業施設では、客を無視しておしゃべり、メールに熱中といった店員、受付係などの態度改善も進められた。

しかし、オリンピック終了半月で大気汚染は元の木阿弥、交通整理のボランティアがいなくなると交差点はカオスに戻ったし、特別施設に収容されていた障碍のある物乞いの少女は、オリンピック終了とともに施設から追い出されたという。それでも痰吐きは減少し、地下鉄では整列乗車が浸透、車の運転マナーもずいぶんよくなったといわれる。

### 欧米人を意識

北京市飲食業界協会は加盟飲食店に対してオリンピック期間中、犬肉料理を出さないよう呼びかけ、市内112店のオリンピック組織委員会契約レストランには犬肉料理禁止を通知した。これは2002年の日韓サッカーワールドカップの際、韓国が犬肉料理で欧米から批判されたのを意識したためだという。

欧米人の目を意識し、欧米文化との対比によって「国の名誉」のために自文化を改変しようとしたのである。

### 過去の礼儀大国をめざして

中国社会科学院マルクス主義研究院の辛向陽研究員が指摘しているように、中国はかつて「礼儀大国」だったが、1919年の反日愛国運動「五・四運動」や、60年代からの文化大革命で、古来の礼儀は「封建的」として排除され、急激な経済成長で「われ先に」、「取り残される」という心理に支配されたために、マナーが悪化してしまった。それゆえオリンピックを控えてマナーを向上させ、かつてのような「礼儀大国」に戻すことに躍起となったというのである（毎日新聞、2007年8月9日）。

つまり、韓国、中国の場合も、日本同様に、衛生、美化、マナーといった人々の行動統制に強い関心が向けられ、上から、欧米文化と過去の自民

族の文化を対比対象とすることによって、現状を批判し、欧米人に認められ、過去の自民族のようになるために、行動、文化を改変していこうとする動きが盛んに行われたのである。

## 第6章 行動統制とアイデンティティー

### I. 細かい行動統制

これまで見てきたように、1964年東京オリンピックでは、開催に当然必要とされる施設や、ホテル、首都高速道路、オリンピック道路などが精力的に整備された。こうした旧来の施設、都市景観を破却し、「近代的」な新しいインフラ整備を進めたことは、戦後の東京という都市の景観を時代遅れとし、当時の日本人が憧れ、理想とした高層ビルが並び、ハイウエーを車が疾走するアメリカ的近代的な都市をモデルとして改変することをめざしたものである。

さらに、大会開催と直接関係があるわけでも、絶対に必要なわけではないにもかかわらず、都市の衛生、清潔、美化にも大変な力が注がれ、犯罪、逸脱行動、そしてマナーなどといった、日常生活の細かな行動にまで種々の統制が加えられたのである。

また、そうした行動統制に際しては、外国人、とりわけ欧米人の目と、昔の日本人、つまり先祖の目を意識していたことがわかる。他方で外国人の目を過剰に意識していることに対する反発も一部で見られたことが注目される。

そこで、以下では行動統制、清潔、美化と日本人のアイデンティティーとの関連という視点から、考察を進めることとする。

### II. 行動統制とアイデンティティー

#### 行動統制とカオスの回避

人は食べなければ生きていけないが、何を食べて飲むべきか、何を食べて飲んでよいかいけなさを、消化できるか否かといった生物学的条件とは別に決め、生で食べられるものでもわざわざ料理し、空腹感とかかわりなく、一日に何回、いつ頃、どんなものを食べるべきか、どこで食べるべきかな

どを決めてしまう。さらに食器を使い、口を食器に近づけず、食べてすぐ横にならないなど、食のマナーも決めてしまう。

排泄も、廃棄も、どこにでも捨ててはならず、トイレやごみ箱を用い、捨てられたものもそのままにはせず、下水道や清掃作業、焼却工場などで処理されなければならないとされる。

異性を獲得する場合も、暴力は許されず、プロポーズ、結納、婚姻届などといった結婚という制度の中で、実際の感情、欲望とは必ずしも関係なく、特定の異性との関係を維持すべきとされたりする。

何かを入手するために先を争うといった場合も、闘争してはならず、予約制とか先着順に行列させるといった文化による統制を創り出してきた。

こうした統制が行われる第一の理由は、本能に基づいた行動をそのままにすれば、人と人、集団と集団の間に摩擦、衝突が生じ、無秩序なカオスとなり、社会的動物である人の社会はうまく動かなくなり、生活どころか生命さえも脅かされるからで、それゆえ人は文化によって本能的行動を捻じ曲げ、文化によって統制しようとするのである。

#### 人というアイデンティティーと動物

これとは逆に、たとえば料理せず生きた魚をかじる、正月でもないのにお節料理を食べる、一日中食べているなどといった食べ方をすると、変な人とレッテルを貼られ、食器を使わずに食べる、食器に口を近づけて食べるといったマナーに反した食べ方は忌避され、排除される。そしてその際口の方を近づけるような食べ方は「犬食い」、食べてすぐ寝ると「牛になる」、ぐちゃぐちゃに混ぜて食べると「猫まんま」、大量に飲むのを「鯨飲」などと称して非難される。すなわち食にともなう行動の統制とは、実は本能のままに食べる動物の食べ方とは異なった食べ方をさせることなのである。

これは排泄、廃棄、異性の獲得、先を争うといった場合も同様で、いずれもカオスの回避が第一の理由であるが、その行動統制とは、異性の獲得を婚姻制度によって統制することも、闘争を法、警

察などによって統制することも、ことごとく本能のままに行われる動物の行動とは異なった行動をさせようとするものであり、実は動物を対比対象として作られた文化なのである。

食べる、排泄するといった本能的行動は、本来、動物も人も共通で、生きていく上で不可避の行動である。それゆえにこそ、人は動物を対比対象として動物同様の行動を排除し、それとは異なった行動に統制しようとする。それによって可能になるのは、自らが他の動物とは異なった、人という存在であるというアイデンティティーを作り、維持することなのである。

### 民族アイデンティティーと異民族

こうした食のマナーのような行動の統制の文化を創り出しているのはそれぞれの民族、地域、さらには家族などであり、それゆえそれぞれ異なるのだが、これは清潔に関する統制でも同様である。

すなわち、人は生きていれば身体に外からの汚れが付着し、体の内から汗、フケ、血、垢、そして排泄物が出て来て、表面に付着する。しかし、ここでもまた人は動物と異なり、こうした状態をそのままにはせず、洗い流すなどのやり方を決めて排除する。そうして身体の境界が明確化された状態がきれいな状態、逆に境界があいまいな状態が嫌悪すべき汚い状態とされるのだが、ここでも、どのように境界を明確化すべきかは、民族、地域、そして小さくは家族の文化によって統制されているため、異なるということになる。それゆえ、清潔の文化を共有することは、ある社会の一員であるというアイデンティティーを共有することを確認することであり、他方共有しないことは、同じ社会の一員ではなく、その人々とはアイデンティティーを共有しないことを明らかにすることにもなるのである。

つまり食、排泄、そして清潔といった行動を統制することによって可能となるのは、まずは動物とは異なる人というアイデンティティーを作り、維持、強化することであり、さらに、それぞれの社会が独自の行動統制の文化を持つことによって、つまり成員が行動統制の文化を共有することによっ

て、それぞれの社会のアイデンティティーを作り、維持、強化することをも可能にしているのである。そしてこの場合も、異民族、異文化の存在は、動物の存在と同様に、相互に、アイデンティティーを確認、維持、強化する上で、対比対象として必要、不可欠な存在というわけである。

### 過去の自文化とアイデンティティー

これを時間軸で考えるならば、同じ民族であっても、時代によって文化は、つまり行動統制は異なる。同時代人とはそうした文化を共有しており、同じような行動を取ることが予測、期待でき、アイデンティティーを共有していることも確認できる。

他方で、過去の時代の人々とは、必ずしも共有していないから、必ずしもアイデンティティーの共有を確認できないのだが、他方で、過去の時代の人々は、同時代人としてのアイデンティティーを確認、強化する上での対比対象として、不可欠な存在ということでもある。

### 行動統制によるアイデンティティー改変

このように行動の統制などを共有することによって、民族としてのアイデンティティーを作り、維持、強化することが可能なわけであるが、これは行動の統制を強制し、改変させ、共有させることによって、アイデンティティーを改変させることも可能ということでもある。

明治維新によって徳川幕府を倒し、大日本帝国を樹立した明治政府は、文明開化を推し進めて欧米文化を模倣、導入したが、これは、憲法、法律といった制度面にとどまらず、鉄道、洋風建築、銀座煉瓦街などに見られるように、都市の景観も江戸時代のものから近代的なものへと改変しようとしたのである。

さらに改変は、人々の日常生活、行動にも及び、単なる風潮による圧力を越えて、明治政府は、法、警察、司法など国家権力の力を用いて、それまでの伝統的生活、行動をも統制、改変させようとした。すなわち、違式註違条例などの制定と取締りにより、銭湯の改造といった衛生面から、そ



れまで当たり前に行われていた博打、混浴、立ち小便、街中での裸体など、日常生活の行動のあらゆる面を統制し、改変させようとしたのである。

その際対比の対象とされたのは、模倣すべきモデルとしては欧米文化、他方の排除すべき逆モデルは、自らのそれまでの伝統文化である。すなわち明治政府は、伝統的行動統制との決別を強制することによって伝統的アイデンティティーを捨てさせ、欧米文化との共通性を創り出すことによって、人々のアイデンティティーを欧米のごとき近代国家の臣民に改変させることができると考えたのである。そして実際のその後の歴史を見れば、人々は長州人、薩摩人、会津人といった小さな地域的アイデンティティーを捨て、近代国家、大日本帝国の臣民という新たなアイデンティティーを共有することとなっているのである。

### Ⅲ. 東京オリンピック当時の日本人のアイデンティティー

#### 敗戦日本人のアイデンティティー

東京オリンピックの開催決定は敗戦からわずか14年、開催年の1964年でも19年しか経っていない。敗戦当時は人的に大変な被害を受け、主だった都市は空襲などで破壊され、城郭、社寺を始め、多くの文化財が失われ、都市景観も大きく変わってしまった。人々は日々の食料にも事欠き、カオスと化した都市の闇市でかろうじて生活を維持してきた。

そんな中、日本のそれまでの文化は劣等な文化とされ、自分たち自身にも自信を失った日本人は、いわばアイデンティティーが不明確な、曖昧な状況に陥ったのである。

#### 新たなアイデンティティー

そんな日本人が憧れ、求めたのがアメリカ人のような民主主義国の国民としての日本人というアイデンティティー、そして物質的、経済的に豊かな先進国民としてのアイデンティティーであった。

そのため模倣、導入に躍起となったのがアメリカ文化であり、オリンピック当時には、民主的な日本国民としての新たなアイデンティティーをか

なりの程度手にしたと感じられるようになったのである。

物質的、経済的にも、戦後復興を経て、産業発展に奮励努力し、昭和30年代後半に入ると、経済高度成長が始まり、ついには経済大国、先進国の国民という新たなアイデンティティーの夢が現実味を帯びてきた。実際資本主義世界で2位の経済力とされ、先進国クラブといわれるOECD（経済協力開発機構）への加盟を果たしたのも、オリンピック開幕半年前の1964年4月28日である。

こうして新たなアイデンティティーを手にすることも間近と感じられるようになった頃に開催されたのが、東京オリンピックだったのである。

### Ⅳ. 現状批判と「創られた伝統」賛美

#### 交通戦争

こうした急速な経済成長は、多くのゆがみをもたらした。なかでも悲劇的なのが交通事故の激増である。当時の東京は大渋滞の中を「神風タクシー」が疾走し、歩行者は邪魔者とされて高い歩道橋に追い上げられ、排気ガスを浴びせられ、事故の恐怖に怯えながら歩くという文字通り「交通戦争」の時代だった。

その結果、交通事故も激増し、1948年には事故21,341件、死者3,848人だったのが、1959年には201,292件、死者10,079人となった。その後も死者は1960年12,055人、1961年12,865人、1962年11,445人、1963年12,301人と増加し、1964年には事故557,183件、負傷者401,117人、死者は13,318人に達し、戦後最悪の数字となったのである。

#### 無責任時代

1962年には植木等主演の映画『ニッポン無責任時代』が大ヒット。「無責任時代」が流行語となったが、プロとしての自覚の足りない店員から公害を垂れ流す企業まで、まさに無責任な風潮が広まっていた。

とりわけ鉄道の安全に関しては深刻な事態で、1962年常磐線で死者160人の三河島事故、1963

年には横須賀線で死者 161 人の鶴見事故と、国鉄戦後五大大事故のうち 2 件が続発した。1964 年は特に多く、立川駅タンク車衝突炎上、京福電鉄衝突炎上、名鉄衝突、東海道線特急脱線と続き、11 月 23 日には開業 2 か月目の東海道新幹線で保線作業員がはねられ 5 名が死亡している。これらは鶴見事故以外はみな職員の不注意や連絡、確認不十分、手順不順守によるものだったのである。

### 環境問題

経済高度成長期には公害企業は污水、有害物質を垂れ流し、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音、振動、地盤沈下、悪臭などが人々を苦しめた。しかし、公害対策基本法施行が 1967 年、東京都公害防止条例施行は革新都政（1967～1979）に変わって後の 1969 年であることからわかる通り、東京オリンピック当時では利潤追求、経済成長、そしてオリンピックこそが至上目標で、行政はほとんど常に企業擁護の立場で対応を怠った。

それどころか、行政は率先してオリンピックのために東京を大改造しようと、もはや経済的価値のなくなった都心の川を埋め立てて高速道路に転用し、墓地などと言う無駄な空間は下にオリンピック道路を貫通させて、車を疾走させようとしたのである（泉、2004）。

### 昔は良かった

こうした状況を背景に、近頃の日本人は民主主義を誤用し、自分の権利ばかり主張し、他方でルールでもなんとかないと考え無責任だとの批判も広がった。「道徳的基準が失われ、ルールもアンパイアも無視したスポーツのよう」、「各自が勝手気ままなことをして他人の迷惑などかまっていられない。これでは‘文化国家’の看板が泣く。」などという批判の背後には、戦前はいいものにせよ悪いものにせよ責任感があったなどと、実際には「創られた伝統」での外れであるにもかかわらず、失われた伝統、過去の美しい日本、日本人、日本文化を賛美する風潮があったのである。

## V. 対比対象としての「外人」と昔の日本人

### 当時の日本人にとっての「外人」

当時の日本人にとって、「外国人に恥ずかしくないように」という外国人とは、ほぼ「青い目」の「外人」とイコール、すなわちアメリカ人、イギリス人、フランス人といった欧米系白人のことであり、それ以外の外国人はあまりにも縁遠く、アジア、ましてアフリカの人々に対しては、かなりの偏見と差別意識があり、それがまた絶対に許されないことである、という認識も必ずしもあったとは言えない時代である。

実際こうした「外人」へのあこがれは、当時東京の中学生だった町田忍が「皆が興味があったことは、外国人をまじかで見られるということだった。それまで外国人と出会うことは日常的にはほとんどなかったの、ナマの外国人を大勢見るといことは、初体験であった。私たちは外国人と見るや、かたっぱしからサインを頼むという行動に出た。」（町田、2004）と述べている通りである。

また陣内秀信もその後の原宿の繁栄について、「オリンピック選手村にかっこいい外国人選手が来て、それを見るために日本の若い女の子が集まる。そこから原宿が華やかになっていった。」（陣内、2004）と分析している。

すなわち当時の日本人にとって、「外人」はまねるべきモデルであり、憧れの対象だったのである。

### 「青い目」の「外人」の日本観

他方で、「外人」側の日本人イメージは、一般的に極めて貧弱で、東洋の異国情緒あふれる国、フジヤマ、ゲイシャガールとトルコ風呂の国、他方で優れたカメラやトランジスターラジオを輸出する国といった程度のもので、ほとんど未知の国でしかなかった。

実際当時の新聞には、外国の教科書に載っている日本人がちょんまげ姿で駕籠に乗っているとか、日本にはエレベーターがあるか、飛行機があるかと尋ねられたといった話が多数紹介されており、日本人は日本がいかにか知られておらず、理解され

ていないかを痛感させられていたのである。

また、日本を良く知る在日「外人」の一部には、自文化を基準に、日本人はマナーが悪く、恥ずかしいといった指摘をする例も見られた。フランス・ニース生まれで母がデンマーク人、しかし実は父は日本人というハーフながら「外人タレント」として人気のあったE・H・エリックも、「日本人は自分の家は見事に掃除するが、外へ出ると紙くずの山」、「ごみ容器、吸い殻入れを多数配置したが、効果は芳しくなく、壊す者さえる。ありのままの東京、日本を見てもらいたい。でも大量の紙くずやたばこのすいがらで埋まったところは日本人の恥ではないか」などと指摘している（読売新聞、1964年4月5日）。

さらに日本人の中でも欧米文化の影響を強く受けた「洋行帰り」「インテリ」といった人々が、欧米文化を基準に日本人のマナーの悪さを指摘しているが、こうした指摘は憧れの対象だった「外人」との対比によるものだけに、当時の日本人に大きな影響を与えたのである。

### 対比対象としての「外人」

当時の日本人は、民主主義国、経済大国、先進国民という新たなアイデンティティを持つにふさわしくなりつつあると考えてはいたものの、他方でひずみも大きく、まだまだ自信はなかった。そのうえ、「外人」側の日本観は大変に不十分で日本人にとっては不本意なものでもあった。要するに内からも外からも、アイデンティティが揺らぎ、不安定な状態だったのである。

そうした中オリンピック開催が決定し、多くの「外人」が日本を訪れて直接日本の街を、日本人を見ることとなったのであり、当時の日本人は、「外人」の目を強く意識し、衛生も、街の美化も、マナーも素晴らしいということになっていた外人を、外人の文化を、対比対象として、倣っていかねばならない、それによって欧米諸国と文化の共通性を高め、経済大国、先進国民として認められ、自らもそのように認識しようと強く意識したのである。

こうして街の景観、衛生からマナーまで、何が

何でも「オリンピックまでに」と必死の努力が繰り返えられることとなったのである。

### 対比対象としての昔の日本

また他方で、明治の文明開化以来の欧米文化模倣、そして敗戦後のアメリカ文化模倣により、日本は近代化し経済高度成長を遂げた。しかし大佛次郎は、技術を真似し、身に着け、磨きをかけることばかりに注力し、「金と経済の話ばかりしている」民族になってしまったとし、東畑精一も「国を挙げて成金という気分」といった民族に成り下がってしまったと認識していた。

吉川幸次郎も、それまでの文化が改変に次ぐ改変を受け「何が日本の文化なのか認識することが困難な状態となり、日本はアジアの国々のうち自国の文化の伝統に一番自信を持たない国」になってしまったと指摘している（読売新聞、1964年4月14日）。

すなわち物質的、経済的には繁栄し、一見立派になったといっても、民主主義国、経済大国、先進国の国民というアイデンティティは未確立で、他方欧米文化の模倣による文化の改変によって、それまでのアイデンティティも改変され、民族としてのアイデンティティが不明確な根なし草的民族になってしまっている、という認識があったのである。

こうして現実には「創られた伝統」ではあるものの、過去の日本人、日本文化を「昔は良かった」と評価し、対比対象として、街の景観も、衛生も、マナーも、こんなことではダメだと、必死の努力を繰り返して、伝統的なアイデンティティを取り戻したいという思いもあったのである。

### 新たなアイデンティティへの希求

このように、当時の日本は、戦前の軍国主義的、家父長的家族、道徳観などから脱し、民主的なアメリカ的価値観を熱心に受容し、さらに経済高度成長を続けて、世界一の新幹線も開業し、経済大国になりつつあった。しかしアメリカ文化はあくまで異文化であり、完全に自文化の一部としてアイデンティティを支えるものにはならず、失

われつつある古いアイデンティティーを良しとする考えも根強かったし、新幹線が疾走し、トランジスタラジオは世界に進出しても、足元の道は泥んこで、住まいは古く狭く、人々は行列も守らずという状態で、あくまで一応民主的な、一応経済大国民、一応先進国民といった状況であり、アイデンティティーが定まらない状態だったのである。

そんな日本人にとって、外からの目が注がれるオリンピックは、あらためて自分たちが何者なのかを確認し、アイデンティティーを創り上げる格好の機会だった。

そうして利用されたのが、衛生、美化、マナーといった行動統制で、先進国民、経済大国民としてのアイデンティティーを確立し、「外人」に認めてもらうために、対比対象として美化された欧米人のマナーなどをより模倣することがすすめられた。

他方で、それまでの自らのアイデンティティーへの思いも根強く、対比対象として過去の日本人、日本文化を美化し、自らの行動をより統制しようとしたのであった。これはいわば当時の揺れる日本人のアイデンティティーを反映したものといえよう。

## おわりに

### I.

近年日本では、人も企業もグローバル化に対応して世界に飛び出し、活躍することが好ましいとされ、若者はグローバル化対応人材をめざす。日本社会も多様性を活かせる活気ある多文化社会に変わるべきだと主張されている。

ところが他方で、中国人のマナーが悪いとする批判が広がり、さらには中国人、中国文化への批判、嫌悪、蔑視、差別感情が渦巻いている。さらに中国に限らず、嫌韓、ヘイトスピーチなど、外国人や異文化への嫌悪といった排外的風潮もみられる。

同時に、日本文化、日本人の素晴らしさ、優秀さ、マナーの良さなどを主張する声も多く、テレ

ビでも日本の伝統文化、アニメ、企業経営、技術や製品、サービスなどを賛美する番組が並び、人気が高い。

ところが他方で、2016年8、9月の調査では、外国人の65%が「東京は人のマナーが良い」と回答したにもかかわらず、都民では25%にとどまったという（朝日新聞、2016年9月21日）。

そして「戦前の日本では、家庭で厳しいしつけがなされ、学校で修身が教えられ、みんなが高い道徳心を身に付けていた。しかし、戦後そうした美德が失われ、今や日本人のマナー・モラルは完全に崩壊してしまった」といった主張がなされ（大蔵、2013）、その要因がアメリカによる憲法、文化などの押し付けだとして、戦後の日本社会、文化の在り方を否定し、明治、戦前の日本の社会、文化を美化し、昔の美しい日本を取り戻そうといった復古的、右翼的思想が、かなりの支持を得ている。

こうした風潮の背景には、経済大国、世界に冠たる技術大国の民といった日本人のアイデンティティーがゆらいでいる状況がある。すなわち、経済高度成長も、バブルも速い過去のものとなり、経済力でも中国に追い抜かれて世界第二の経済大国の地位から滑り落ち、世界に冠たる技術を誇ってきた日本企業も不祥事やら技術・革新力不足などで韓国、台湾、中国などの企業に追いつき、追い越されつつある。さらに急速な人口減少と高齢化、非正規労働者の激増、中間層の没落と格差の拡大、積み上がる膨大な財政赤字、年金問題などで将来に多くの不安を抱え、夢を持てなくなり、自信を失っていることがある。さらには、人口減により、世界に打って出るグローバル化に取り組みなければならず、移民、難民などの受け入れによる人口維持も迫られることになると、単一民族幻想に囚われてきた日本社会が多文化社会化することになり、自らのアイデンティティーが大きく揺らぐことが予想される。

これは1964年当時と同じではないものの、アイデンティティーが揺らぎ、自らへの批判と賛美が並び、新たなアイデンティティーを模索する、という点でよく似ている。



すなわちグローバル化の先進地である欧米を対比対象、モデルとして自らを批判し、グローバル化に対応した国際的感覚あふれる日本人になるべく文化とアイデンティティの改変を進めようとする点はよく似ている。また過去の日本を対比対象として過去の日本人、日本文化を賛美し、これまでのアイデンティティを維持したり、過去のアイデンティティに戻そうとするという点も似ている。

ただし、対比対象が中国人などとなると、モデルとして自文化の改変を進めるのではなく、逆に批判、排除の対象とする点では相違している。

いずれにしても、異文化、過去の自文化を対比対象として、アイデンティティを模索しているというのが現在の日本人というわけである。

## II.

2020年東京オリンピックの開催が決定すると、1964年と同じように、東京では都市再開発が急ピッチ進められている。品川駅周辺は「グローバルゲートウェイ」計画として国際金融センターなど、グローバル化拠点の開発が進められ、中心となる1971年以来初の山手線新駅は競技会場とは無縁ながらオリンピックに間に合わせて2020年春の暫定開業をめざしている。建設中のリニア中央新幹線に関しても、実現はしなかったものの、オリンピックに間に合わせて品川、山梨県駅までの繰り上げ部分開業が求められていた。

その他虎ノ門周辺の再開発と日比谷線新駅建設、銀座線や日比谷線の駅リフォーム、新車への入れ替えなどが、オリンピックをめざして進められている。

また外国人への「おもてなし」が強調されるとともに、山手線や大阪環状線、そして首都高速都心環状線、中央環状線、東京外環自動車道、明治通り、山手通り、環七、環八、福岡高速環状線などでも使われてきた「内回り」「外回り」などというのは「2020年までに」「外国人に分かりやすく」改めるべきだ、などという主張もなされ始めている（夏野、2014）。これは内回り、外回りは、ソウル、ロンドン、グラスゴーの地下鉄環状線、

アメリカ各地の環状道路などでも使われていることを知らないままの主張で的外れなのだが、こうした1964年当時同様の主張が再び出現しているのである。

そしてやはり1964年同様に、規範意識と国際性を高めることを目標に、小中高校で「五輪教育」が計画され、またまた外国人と過去の日本人を対比対象としてマナーなどを改変する行動統制も進められようとしている。

オリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く」は、経済高度成長期の1964年オリンピック当時にはまさに日本社会のモットーそのものでもあり、一丸となってすべてをオリンピックのために、となったのも、無理からぬ面があった。しかしながら、現在の日本は、人口減、高齢化による「老大国化」が進み、多文化社会化も避けられない状況にある。そんな中、やさしさ、多様性の尊重こそが重要であり、実は国民文化を創り出すために発明されたに過ぎない「創られた伝統」（ホブズボウム、1992）や「外国」をモデルにする、といった上からの一元的行動統制による文化、アイデンティティの変容を求めることは、もはやそぐわないことは明らかである。

急激なグローバル化が進み、生活も文化も激変し、人も社会も、企業も、政治も、先が読めず、途方に暮れている。そんな中やってくる2020年オリンピックは、日本人が、どのような新たな文化、アイデンティティを求めていくのかを模索する格好の機会としなければならないだろう。

## 文 献

- 赤瀬川原平、1994、『東京ミキサー計画 ハイレッド・センター直接行動の記録』、筑摩書房
- 秋山祐徳太子、1985、『通俗的芸術論』、土曜美術社
- 青木美智男、森謙二、『三くだり半の世界とその周縁』、日本経済評論社
- 夫馬信一、2016、『幻の東京五輪・万博1940』、原書房
- 後藤春彦、松井勝紀、1994、「行政課題としての‘新幹線車窓景観’と‘野立て広告’」、『日本建築学会計画系論文集』、第466号、日本建築学会
- 原田勝正、1998、『鉄道と近代化』、吉川弘文館
- 原田実、2014、『江戸しぐさの正体 教育をむしろむ

偽りの伝統』, 星海社  
 橋本一夫, 1994, 『幻の東京オリンピック』, 日本放送出版協会  
 エリック・ホブズボウム, 1992, 『創られた伝統』, 前川啓示, 梶原景昭訳, 紀伊國屋書店  
 泉麻人, 2004, 「昭和30年代のニュース映画を見る。」, 『東京人』206号, 都市出版  
 陣内秀信, 2004, 「変わったのは街だけじゃなかった!」『東京人』206, 都市出版  
 小林信彦, 2002, 『私説東京繁昌記』, 筑摩書房  
 礪川全次, 2008, 『ワザと身体民俗学』歴史民俗学資料叢書第3期 5(3), 批評社  
 古城庸夫, 2016, 『「幻の東京オリンピック」の夢にかけた男』, 春風社  
 町田忍, 2004, 「町田忍秘蔵, 東京五輪スクラップブック。」, 『東京人』206, 都市出版  
 松永しのぶ, 2011, 「違式註違条例と外国人への「御体裁」——裸体といれずみの禁止を巡って」, 『文化資源学』9, 文化資源学会  
 パオロ・マッツァリーノ, 2015, 『「昔はよかった」病』, 新潮社  
 パオロ・マッツァリーノ, 2016, 『みんなの道徳解体新書』, 筑摩書房  
 永井良和, 2002, 『風俗営業取締り』, 講談社  
 長尾龍一, 2013, 「ケルゼンにおける法と道徳」, 『ケルゼン研究Ⅲ』, 慈学社出版  
 中野良夫, 1964, 「オリンピック逃避行」, 「朝日新聞」, 1964年10月16日  
 夏野剛, 2014, 「逆説進化論 なんで「内回り」って言うの?」, 『朝日新聞』, 2014年1月11日  
 西村兼之, 『京都府違式註違条例図解』, 西村兼之  
 奥野健男, 1964, 「オリンピック賛」読売新聞, 1964年10月14日  
 大倉幸宏, 2013, 『「昔はよかった」と言うけれど: 戦前のマナー・モラルから考える』, 新評論  
 大岡昇平, 1964, 『週刊読売』, 1964年10月11日号

清水勲, 2013, 『サザエさん事典』, いそっぷ社  
 武田知弘, 2008, 『教科書には載っていない! 戦前の日本』, 彩図社  
 武田知弘, 2011, 『教科書には載っていない大日本帝国の真実』, 彩図社  
 武田知弘, 2013, 『昭和30年代の「意外」な真実』, 大和書房  
 竹熊健太郎, 2007, 『箠棒な人々——戦後サブカルチャー偉人伝』, 河出書房新社  
 帝都高速度交通営団, 1991, 『営団地下鉄五十年史』, 帝都高速度交通営団  
 斗鬼正一, 2016, 「中国人への過剰反応の裏」, 『週刊女性』, 2016年3月15日号  
 東京都江戸東京博物館, 2014, 『東京オリンピックと新幹線』, 青幻舎  
 宇ノ木建太, 2012, 「戦後日本の「近代化」と新生活運動——新生活運動協会の取り組みを対象として——」, 『政策科学』, 立命館大学政策科学部  
 辻田真佐憲, 2017, 『文部省の研究』, 文藝春秋  
 山崎壮重, 1937, 「外国人迎接の心得」日本文化講座; No. 15, 第7回世界教育会議日本事務局

#### ホームページ

小さな親切運動本部 <http://www.kindness.jp/about/>  
 松本市 <https://www.city.matsumoto.nagano.jp/shisei/matidukuri/kankyomidori/hanaippai/index.html>  
 大阪府, 1876, 「罪目七十七ヶ条図解」, 『大阪府明治九年第三百三十二号/大阪府御布令之訳』  
 東京都下水道局, 2008, 『ニュース東京の下水道』No. 213 (2008.12) (都下水道局 <http://www.gesui.metro.tokyo.jp/business/kanko/kankou/2014tokyo/05/>)  
 東京都建設局 <http://www.kensetsu.metro.tokyo.jp/gairoyu/hyoushi4/>